戦前日本における女子フットボールの様相に関する歴史的基礎研究

崎田 嘉寛¹⁾ 寶學 淳郎²⁾ 藤坂 由美子³⁾
 近藤 剛⁴⁾ 田邊 圭子⁵⁾ 津内 香⁶⁾

SAKITA Yoshihiro¹, HOUGAKU Atsurou², FUJISAKA Yumiko³, KONDO Tsuyoshi⁴, TANABE Keiko⁵ and TSUUCHI Kaori⁶: A historical fundamental study of women's football in prewar Japan. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci.

Abstract: The purpose of this study was to acquire historical insights into women's football in prewar Japan. The study had 2 specific aims: 1) to analyze the origin and development of women's football in Japan through information gathered at higher educational institutions for women (The Girls' Higher Normal School, Nara Women's Higher Normal School, Japan Women's College, Tokyo Women's School of Gymnastics and Music) and 2) to analyze the growth of women's football using information collected at public high schools for girls. To achieve this, the historical records of 422 school were reviewed.

To address the first question, it was investigated whether instruction and guidance were available at higher educational institutions for women, and whether football was an extra-curricular activity. The data suggested that while football might have been taught both as part of the regular curriculum and as an extra-curricular activity, none of the institutions played a key role in the shift from casual to competitive play or in the growth of football throughout Japan. Analysis of the expansion of football revealed that, of the 286 girls' public high schools surveyed, 53 offered football; these institutions were broadly distributed from Kyushu to Hokkaido. Evidence of women's football was confirmed from 1902 to 1940, most instances being in the Taisho era (1912–26), followed by the Meiji era (1868–1912) and the Showa era up to 1945 (1926–45). Football was played mostly during free time and athletic meetings, but it was also sometimes played during class, as a club activity, and during excursions. In some cases, football was played regularly and school competitions were held; however, there were no confirmed examples of inter-school competitions. The involvement of instructors, uniforms, equipment, and rules at the 53 schools was established. The data suggest that instructors, including principals, were involved to some extent, and that football was made more accessible by the provision of appropriate uniforms and equipment. There were mixed results for rules; in some cases, football was played casually with relaxed rules, while in other cases, female students played more competitively and organized association football like their male counterparts.

This study is significant in being the first attempt to empirically examine the history of women's football in Japan.

Key words : girls' public high school, instructors, uniforms, equipment, rules

キーワード : 公立高等女学校, 指導者, 服装, 用具, ルール

- 1) 北海道大学大学院教育学研究院
〒060-0811 北海道札幌市北区北11条西7丁目
- 2) 大阪成蹊大学教育学部
〒533-0007 大阪府大阪市東淀川区相川3-10-62
- 3) 東京女子体育大学体育学部
〒186-8668 東京都国立市富士見台4-30-1
- 4) 四国学院大学文学部
〒765-8505 香川県善通寺市文京町3-2-1
- 5) 北陸学院大学人間総合学部
〒920-1396 石川県金沢市三小牛町イ11
- 6) 日本サッカー協会
〒113-8311 東京都文京区本郷3-10-15 JFAハウス

1. Faculty of Education, Hokkaido University
Kita11 Nishi7, Kita-ku, Sapporo, Hokkaido 060-0811
2. Faculty of Education, Osaka Seikei University
3-10-62 Aikawa, Higashiyodogawa-ku, Osaka, Osaka 533-0007
3. Faculty of Physical Education, Tokyo Women's College of Physical Education
4-30-1, Fujimidai, Kunitachi, Tokyo 186-8668
4. Faculty of Literature, Shikoku Gakuin University
3-2-1 Bunkyocho, Zentsuji, Kagawa 765-8505
5. School of Human Integration, Hokuriku Gakuin University
11 Mitsukoujimachi, Kanazawa, Ishikawa 920-1396
6. Japan Football Association
JFA House, 3-10-15 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-8311
Corresponding author sakita@edu.hokudai.ac.jp

連絡先 崎田嘉寛

I はじめに

戦前期の日本におけるサッカーに関する歴史研究は、福島（2011）、實學（2016）、恩田（1982, 1984, 1985）、大久保（2013）、山本（2005）、山本・後藤（2003）によって、主として明治・大正期を中心として知見が蓄積されてきた。これらの研究では、「近代的サッカー競技」（恩田，1982）あるいは「組織的なサッカー」（大久保，2013）を対象としており、いわゆるアソシエーションフットボールの日本への移入とその形成と展開、そして普及と定着について明らかにしている。概説すれば、外国教員や指導書・翻訳書による移入、東京高等師範学校による競技形成と各師範学校における展開、中等教育段階での課外活動および男子正課体育教材の中での普及と対外試合や全国大会の組織化を通じた定着となる。しかしながら、實學（2016）は、サッカーの移入と展開に関する研究などを深めるためには、さらなる実証的な個別研究を積み上げ、議論しなければならないと指摘している。管見の限りではあるが、女子を対象としたサッカーに関する歴史研究はない。既存研究を男子サッカー史であると捉えたときに、特に戦前期における女子を対象としたサッカーの歴史的解明が残された課題の1つとして措定されよう。

さて、福島（online）は、明治・大正期の新聞記事や絵葉書から、女子によるサッカーが実施されていた形跡を断片的に示している。ただし、戦前の学校体育制度においては、女子の教材としてアソシエーションフットボールは採用されておらず、文部省訓令第22号の改正「学校体操教授要目」（大蔵省印刷局編，1926）の低学年教材として「対列フットボール」^{注1)}が示されているのみである。また、戦前において女子サッカーの対抗試合や全国大会があったことは報告されていない（來田，1997）。以上のことから、戦前期における女子を対象としたサッカーの歴史的解明には、学校体育用に教材化されたサッカーあるいは遊戯形態としてのサッカー（以下「フットボール」略す）を含めて検討する必要がある。

そこで本研究は、戦前期^{注2)}の日本における女子フットボールの様相を歴史的に明らかにすることを目的とする。

II 研究方法

日本における近代スポーツの移入と展開に教育機関が大きな役割を果たしたことは周知のとおりである。このため、本研究における課題の1つ目は、女子教員の養成を担った女子高等教育機関におけるフットボールについて明らかにすることである。この課題は、女子フットボールの移入と展開を検討することを念頭に、男子サッカー史研究の成果を踏まえて、指導者、指導書、課外活動の有無に焦点をあて、これらを女子フットボールの「様相」を捉える要素として明らかにする。課題の2つ目は、女子中等教育機関におけるフットボールの状況を明らかにすることである。この課題は女子フットボールの普及について検討することがねらいである。そのため、女子フットボールの実施時期と機会を把握し、具体的な様相を教員の関与や服装、用具、ルールを分析視点として明らかにする。ただし、すべての女子中等教育機関について検討することは困難であるため、本稿では公立の高等女学校（以下「公立高女」と略す）を対象を限定する。そのため、私立高女、外地の高女、実業学校、師範学校および初等教育段階における女子フットボールの状況については、本研究成果との比較を通じて把握されるべき今後の課題となる。

ところで、戦前期における未調査のスポーツ種目に関する全国的な実施状況を歴史的に把握する方法は確立されているわけではない。また、戦前期の女子フットボールという限定的な身体活動の状況を全国的に把握するためには、資料の選定に工夫が必要となる。特に公立高女は、1885年に9校で始まり、1895年に15校、1905年に89校、1915年に164校、1925年に459校、1935年に575校、1945年に908校と増加している（高等女学校研究会編，1990）ため、すべての公立高女の悉皆調査を実施するのは困難である。そこで、本

研究では学校史（誌）を主たる資料とし^{注3)}、資料状況を踏まえて著者の判断で可能な限り調査地域の偏りが少なくなるよう配慮し、いわば有意抽出による標本調査のように資料を収集し検討を試みる。もちろん研究成果に限界はあるが、本研究は女子フットボールを歴史的に解明しようとする初めての試みという意味で歴史的基礎研究と位置づけることができる。この点が本研究の意義であるといえる。

Ⅲ 女子教員養成機関におけるフットボール

日本における女子フットボールの移入と展開を検討する上で、特に留意すべき点は、教員養成を担った女子高等教育機関で教鞭をとった指導者および彼らの著作、そして運動会を含む課外活動での実施状況であろう。ここでは、官立の東京女子高等師範学校^{注4)}と奈良女子高等師範学校、および私立の日本女子大学校と東京女子体操音楽学校を対象として女子フットボールの状況を確認する。

1. 東京女子高等師範学校

東京女子高等師範学校は、前身校の設立時から体操を教科として位置づけ、1878年にはジョージ・A・リーランドが直接に体操の指導に携わっている（今村、1968）。また、1903年には国語体操専修科を設置し、本格的に女子体育教員の養成を開始している。さらに、入学に際して体格が考慮され、運動会、教職員と生徒による親睦会（如蘭会）、体育競技会を通じて運動が奨励されている。そのため、体操科以外を専門とする卒業生においても、赴任校で体操科を担当することもあった（掛水、2016）。

同校では、リーランドの通訳を務めた坪井玄道が1890年から教鞭をとっている（東京体育科学研究会編、1970）。彼は体操伝習所の中心教員であった1885年に『戸外遊戯法：一名戸外運動法』を刊行し、その中で「フットボール（蹴鞠の一種）」（坪井・田中編、1885）を紹介している。また、1903年には『アソシエーションフットボール』

を監修している。同書では「外国にては婦人の遊戯としても行はれ居る」と紹介しつつも、女子に適しているかどうかは専門家に一任すべきと指摘するにとどまっている（東京高等師範学校フットボール部編、1903）。この専門家にあたる人物の1人として、同校では遊戯研究で知られた高橋忠次郎が1900年から嘱託として勤務している。彼が1904年に著した『新式女子遊戯法：理論實際』の中で「フットボール遊戯」として「円陣フットボール」と「三叉球」を紹介している（高橋・酒話、1904）。

2. 奈良女子高等師範学校

奈良女子高等師範学校については、江刺編（2003）によって戦前期の体育活動が包括的に整理されている。同校では、1909年に授業が開始された当初から体操が科目として位置づけられている。この正課体育において、1914年から1926年度までの遊戯種目として「フットボール・蹴鞠」が行われていたことが確認できる（江刺編、2003）。一方で、同校では、課外活動として校友会運動部（係）が組織され、運動会、校内競技大会、水曜日午後の運動が実施されている。1924年度には競技係、テニスピンポン係、弓道係、薙刀係、行進遊戯係、遠足係が設置されており、競技係の事務分担の1つとして「蹴鞠」の記載を確認することができる（奈良女子高等師範学校編、1926）。

同校において戦前期に在任していた体育担当教員は、香川ツヤ、菊澤（森田）三壽、高橋キャウ、鶴本ヨ子、雑賀三省、及川うめ、内田トハ、永田博、小山田ハナコである。この中で、『女子体育学』を著した雑賀は、「女子に適する遊戯及び競技」として「激烈ならざるボール蹴り」を挙げている（雑賀、1924）。

3. 日本女子大学校

日本女子大学校は、1901年に日本で初めての女子の大学校として設立されている。1915年4月の『東京朝日新聞』には、同校の体育活動は、東京女子高等師範学校よりも「細心の注意を以て比較的大仕掛けにそして自由に行動している」（東

京朝日新聞、1915)と紹介されている。

同校の戦前期における運動会を含む体育活動については、馬場(2014)、馬場・石川(1982)がまとめている。馬場によれば、1911年の同校の体育会は、バスケットボール部、テニス部、蹴球部、薙刀部、自転車及び自転車打球部、ダンス部、ピンポン部で構成されていることがわかる(馬場、2014)。蹴球部については、体育会の設立当初から設置されていたわけではなく、継続して存続したかは不明である。一方で、同校の運動会では、1926、1929、1933年の競技にキックボール、1935年の競技に対列フットボールを確認することができる(馬場・石川、1982)。

同校における戦前の体育担当教員数について、馬場(2014)は40名であると報告している。ただし、教員名は判然とせず、すべての著書を渉猟することはできていない。しかし、初代体育教員の白井規矩郎については、フットボールに関する記述を管見の限り確認できなかったが、「バングボール」という手で行うフットボールのような遊戯を紹介している(白井、1910)。

4. 東京女子体操音楽学校

東京女子体操音楽学校は、1902年に女子体育教員養成機関として開学している。同校の設立からの様子については、掛水(2018)において詳述されているが、フットボールに関しての言及は見られない。一方で、福島(online)は、1904年7月1日付の『東京朝日新聞』に基づいて、同校に女子運動倶楽部が設置され、フットボールの用具が備えられていたことを紹介している。

掛水(2018)によれば、同校の開学当初の教員数は23名であるが、実際にはもっと少数であり、1905年には12名であったことが明らかにされている。具体的には、高橋忠次郎、可児徳、佐薙喜志太、太田勘七、山本祐吉、松野勇弥、谷口謙造、熊谷肱助、林田巖、矢野フサヨ、稲岡シゲ、藤村トヨである。同校の校長は、先述した東京女子高等師範学校の嘱託を務めた高橋忠次郎である。また、可児が関わった遊戯書では、「ハンドフットボール」(坪井・可児編、1909)、「略式フットボ

ール」(上原編、1910)、「対列フットボール」(可児・佐々木、1921)が記されている。

ここまで、教員養成を担った女子高等教育機関における女子フットボールの状況を確認してきた。女子高等教育機関では、正課体育あるいは運動会を含む課外活動において競技としてのフットボールや遊戯化されたフットボールが紹介あるいは教授された可能性はある。正課体育での実施は教授法を伴っていたと考えられ、女子フットボール普及の1つの契機となり得たと推察される。また、日本女子大学校において、女子によるフットボールが部として存在した点が注目される。しかしながら、現時点では、実施状況の仔細を明らかにする資料の発掘には至っていない。

IV 公立高等女学校における フットボールの状況

文部大臣官房学校衛生課は、1924年に「中等学校ニ於ケル体育運動競技種目別調査」を行っている。この調査では、高等女学校および実科女学校の26校(684校中)で「蹴球」が実施されていたことが報告されている(文部大臣官房学校衛生課、1924)。また、同課体育運動掛による1927年の「全国女子中等学校ニ於テ行ヒツ、アル課外運動ノ種類」調査報告では、埼玉、新潟、京都、三重、福岡、佐賀、熊本、長崎で「フットボール」が実施されたことが示されている(文部大臣官房学校衛生課体育運動掛、1927)。女子中等教育機関の課外活動においてフットボールが複数府県で実施されていた証左であるが、学校名だけでなく公私を含む学校種も不明である。一方で、文部大臣官房体育課が1933年に実施した「中等学校ニ於ケル校友会運動部ニ関スル調査」では女子中等学校(949校)で「ア式蹴球」を実施していた学校は確認されておらず(文部大臣官房体育課、1933)、1941年に朝日新聞が実施した「全国男女中等学校体育調べ」では「蹴球」を実施していた実科女学校が1校(783校中)報じられているのみである(朝日新聞、1941b)^{注5)}。

そこで、女子フットボールの普及の一端につ

いて把握するために、公立高女を対象として戦前の実施状況を調査した。この際、422冊の学校史(誌)等(286校)を主たる資料として通覧し、フットボールおよびこれに類する語句(フットボール、蹴球等)を含む記述および写真を探索した。

1. 調査結果の概要

本調査の結果、67冊の資料(調査資料数の約16%)から、33都道府県(約70%)の53校(調査校数の約19%)においてフットボールに関する記述および写真を確認した。表1に53校の所在都道府県、学校名、記述内容および出典の編著者を示す。

以下、表1に基づいて、全体の傾向について概説するとともに、特徴的な記述内容を例示する。なお、以下の文章では、読みやすさを考慮して、学校史(誌)等からの引用方式を「学校名(表1の通し番号、出典の編著者に示した年号)」とする。たとえば、「丸亀高女(表47, 1973a)」と表記する。

2. フットボールの実施時期

まず、フットボールに関する記述が確認された時期を分類すると、明治期が16校、大正期が29校、昭和期が6校、時期特定困難が2校であった(表1参照)。なお、時期が区分をまたがる場合は時期が古い方に入れてカウントしている。時期が特定できた中で、最も古い時期は1902年の記述であった。また、昭和期については、1940年まで確認できた。

具体的には、松山高女(表48, 1961)では明治40年代に、尾道高女(表41, 1990)、山口高女(表45, 1990)、熊本第一高女(表52, 1935)では大正期に女子フットボールが盛んであった記述を確認できる。一方で、丸亀高女(表47, 1973a)については、1920年の庭球部の復活に際して、「学校の運動としてフットボールが盛んであったが庭球部が休部状態から脱却し、第一回庭球校内大会が開催されて、運動部に新たな息吹きがみなぎった」と記され、東金高女(表15, 1939)については、大正後期に「スポーツではテニスが一番盛

で、次がフットボール」と回想されている。また、大分高女(表53, 1986, a)では、フットボールは1919年頃から奨励され、その勢いは「校技」に匹敵するほど盛んに行われていたテニスの影をうすれさせる程であったと記述されている。このように、大正期には、フットボールが特に盛んであった公立高女も存在していたことがわかる。

3. フットボールの実施機会

次に、フットボールが実施された機会は、実施機会が不明な場合を除いて6項目に分類できた。時期を含めて示すと(重複有)、教育課程が1校(明治期)、部活動が2校(大正期2校)、休憩時間および放課後等の自由時間が19校(明治期7校、大正期11校、昭和期1校)、運動会が16校・21件(明治期6件、大正期10件、昭和期5件)、遠足が1校(明治期)、同窓生関係が2校(明治期1校、昭和期1校)、実施機会不明が16校であった(表1参照)。

教育課程については、唯一、松山高女において授業時間におけるフットボールの実施が確認された。ここでは、1908年5月16日に「一時間目の体操はフットボールの競技となりぬ」(表48, 1995)と記されている。

部活動(校友会、学友会)として記録が残っているのは、旭川高女と宮城第二高女であった。旭川高女(表2, 1938)では、1919年の校友会の状況として「事業部を次の如く分立せしめ…二、運動部 1弓術部 2テニス部 3ピンポン、フットボール部 4大運動会」と記され、宮城第二高女(表5, 2005)については、「大正十年には庭球部、弓道部、投球部、蹴球部の四部が確認できる。そのうち『蹴球』は現在ではサッカーを示すが、当時の活動内容は不明である。大正十一年には部の活動状況に記載がないところをみると、部創設一年で廃止になったものと思われ、本格的に活動したのではないのであろう」と述べられている。

自由時間(休憩時間および放課後等)については19校と最も多く確認できたが、この中で注目されるのは、愛知第一高、彦根高女、三次高女、可部高女である。たとえば、愛知第一高女(表

表 1-1 フットボール記事掲載の都道府県別学校一覧

	都道府県名 [†]	学校名 ^{††}	内容	出典の編著者
1	北海道 (7/7)	上川高女	自由時間 (1908 年以後)	上川高等女学校 (1911)
2		旭川高女	部活動 (1919 年)	北海道庁立旭川高等女学校 (1938)
3	青森県 (4/5)	第一高女	運動会 (1906 年)	校史編纂委員会編 (1980)
4	岩手県 (5/9)	一関高女	指導者 (明治後期)	「一関二高 60 年史」編集委員会編 (1967) 記念誌編纂専門委員会編 (2007)
5	宮城県 (5/8)	第二高女	部活動 (1921 年)	宮城県第二女子高等学校 (2005)
6	秋田県 (5/5)	秋田高女	運動会 (1909 年)	あげまき会・秋田県立秋田北高等学校編 (1981)
7	福島県 (5/6)	会津高女	運動会 (1918 年)	福島県立会津女子高等学校創立八十周年記念誌編集委員会編 (1988)
8	茨城県 (4/6)	竜ヶ崎高女	自由時間 (大正後期)	茨城県立竜ヶ崎第二高等学校編 (1968)
9		土浦高女	同窓会事業としての運動 (1905 年)	百周年記念誌編纂委員会編 (2003)
10	栃木県 (5/6)	宇都宮高女	自由時間 (1913, 14 年)	村木定雄編 (1936)
11	群馬県 (7/10)	桐生高女	自由時間 (1909 年頃)	群馬県立桐生女子高等学校編 (1997)
12		渋川高女	運動会 (1926 年)	渋女 60 年誌編纂委員会編 (1981)
13	埼玉県 (4/7)	第一高女	自由時間 (1905 年以後)	埼玉県立浦和第一女子高等学校創立八十周年記念誌編集委員会編 (1980)
14	千葉県 (5/10)	千葉高女	回想 (大正中頃)	千葉県立千葉高等女学校編 (1940)
15		東金高女	回想 (大正後期)	牧野武夫編集代表 (1939)
16	東京都 (4/9)	第三高女	写真 (時期不詳)	創立百周年記念誌編纂委員会編 (2003)
17	神奈川県 (5/10)	厚木高女	服装 (時期不詳)	神奈川県立厚木東高等学校創立 70 周年記念会編 (1978) 神奈川県立厚木東高校編 (2007)
18	新潟県 (9/9)	長岡高女	応援歌 (1904 年)	新潟県立長岡大手高等学校創立百周年記念誌編集委員会編 (2003)
19	富山県 (5/7)	砺波高女	運動会 (1926 年)	富山県立砺波女子高等学校同窓会砺波野の会 (2002)
20		魚津高女	運動会 (昭和初期)	魚高八十年史編集委員会編 (1978)
21	石川県 (5/8)	羽咋高女	運動会 (1941 年)	石川県立羽咋高等女学校 (1935) 石川県立羽咋高校「五十年史」校内編集委員会編 (1972)
22	静岡県 (7/10)	榛原高女	自由時間 (1920 年頃)	「榛原高校百年史」編集委員会編 (2000)
23		静岡高女	自由時間 (大正後期)	創立八十周年記念事業委員会編 (1983)
24		沼津高女	用具 (1913, 15 年)	静岡県立沼津高等女学校校友会 (1926) 創立九十周年記念誌作成委員会編 (1990)
25	愛知県 (8/12)	第一高女	自由時間 (1908 年頃)・ 定期実施・校内大会	愛知県第一高等女学校史編集委員会編 (1998), a 明和会記念誌編集委員会編 (1998), b
26		津島高女	運動会 (1918 年)	愛知県立津島高等学校九十周年記念誌編集委員会編 (1990)
27		岡崎市立高女	その他 (1916 年頃)	創立 100 周年記念事業実行委員会記念誌編集部編 (2007)
28	滋賀県 (5/6)	彦根高女	自由時間 (1912 年)・ 定期実施・校内大会	滋賀県立彦根高等女学校編 (1936)
29	京都府 (9/20)	堀川高女	運動会 (1933 年)	京都市立堀川高等女学校校友会 (1933)
30	大阪府 (5/10)	清水谷高女	運動会 (1902 年)	大阪府立清水谷高等学校 100 周年記念事業実行委員会記念誌 委員会編 (2001)
31		大手前高女	用具 (1917 年)	大阪府立大手前高等学校百年史編集委員会編 (1987)
32	兵庫県 (8/12)	神戸第一高女	その他 (昭和初期)	神戸市立第一高等女学校編 (1942)
33		柏原高女	その他 (大正初期)	兵庫県立柏原高等女学校編 (1928)
34	奈良県 (7/7)	五條高女	運動会 (1923 年)	奈良県立五條高等学校創立百周年記念誌編集委員会 (1996)
35	鳥取県 (4/7)	米子高女	運動会 (1921,24,27 年)	創立八十周年記念誌編纂委員会 (1987)
36	島根県 (7/7)	浜田高女	自由時間 (1923 年)	浜田高等学校創立百周年記念事業部編 (1994)
37	岡山県 (8/16)	第一岡山高女	自由時間 (1904 年)	創立七十年史編集委員会編 (1969)
38		勝山高女	その他 (昭和初期)	勝山高等学校創立九十周年記念誌編集委員会編 (2001) 岡山県立勝山高等学校 (2011)

表 1-2 フットボール記事掲載の都道府県別学校一覧

	都道府県名 [†]	学校名 [‡]	内容	出典の編著者
39	広島県 (7/8)	三次高女	自由時間 (1925 年)・ 定期実施・校内大会	広島県立三次高等学校創立百周年記念誌編集委員会編 (2001)
40		可部高女	自由時間 (1927 年)・ 定期実施・校内大会	広島県立可部高等女学校編 (1932)
41		尾道高女	用具 (1916 年)	八十周年記念誌編集委員会編 (1990)
42		第一高女	服装 (1913 年以前)	八〇周年記念誌編集委員会編 (1982) 九〇周年記念誌編集委員会編 (1991)
43	山口県 (7/8)	厚狭高女	自由時間 (1905 年頃)	山口県立厚狭高等学校編 (1957)
44		長府高女	自由時間 (1914, 15 年)	山口県立長府高等学校六十年史編纂委員会編 (1972)
45		山口高女	運動会 (1916 年)	山口県立山口中央高等学校百年史編纂委員会編 (1990)
46		防府高女	その他 (明治後期)	山口県立防府高等学校編 (1979)
47	香川県 (6/11)	丸亀高女	自由時間 (大正期) 運動会 (1906, 11 年)	香川県立丸亀高等学校 (1973a, 1973b) 香川県立丸亀高等学校創立百周年記念誌編集委員会編 (1993a, 1993b)
48	愛媛県 (5/10)	松山高女	教育課程 (1908 年)	愛媛県立松山南高等学校創立七十周年記念誌編集委員編 (1961) 浜田祐輔解説・編 (1995) 愛媛県立松山南高等学校百年記念校史編集委員会編 (1991)
49		今治高女	運動会 (1909 年)・ 遠足 (1911 年)	創立百周年記念通史編集委員会編 (1999)
50	福岡県 (11/16)	福岡高女	自由時間 (1916, 17 年)	福岡県福岡中央高等学校六十周年記念史編集委員会編 (1958) 福岡県立福岡中央高等学校百年史委員会編 (1998)
51	熊本県 (6/8)	高瀬高女	自由時間 (1915 年)	熊本県立玉名高等学校校史編纂委員会編 (1973)
52		第一高女	回想 (大正期)	熊本県立第一高等女学校 (1935)
53	大分県 (8/9)	大分高女	自由時間 (大正期) 運動会 (1912, 16, 32 年)	大分県立大分上野丘高等学校編 (1986), a 津田露 (1986), b

[†] 都道府県名の横に示した丸括弧内は「調査学校数／調査資料数」を示している。なお、表中に示していない県については、次の通り。山形県 (6/9)、山梨県 (3/4)、長野県 (9/11)、福井県 (5/5)、岐阜県 (5/7)、三重県 (7/8)、和歌山県 (7/12)、徳島県 (6/12)、高知県 (6/11)、長崎県 (6/8)、佐賀県 (6/12)、鹿児島県 (8/11)、宮崎県 (5/6)、沖縄県 (5/9)。

[‡] 学校名は、フットボールに関する記述があった学校名を示している。

25, 1998a) については、1907 年に鶴飼金三郎が二代校長に就任し、「明治四十一年五月には、庭球練習会が開かれるようになった。生徒は毎日、昼食後と授業後の三〇分ずつ、必ず校庭に出て運動することを定められていた。とくに木曜日 (のち火・木曜日) には、全校そろってフットボールを行うことになっていた」とあり、フットボールが定期的実施されたようである。一方で、可部高女 (表 40, 1932) では、「庭球、蹴球、籃球、排球の中一種選んで毎週の運動日にそれを練習し、毎学期 1 回競技小会を行い、秋季大会を行うことになって居る」と同校生徒が記しており、校内大会の競技の 1 つとしてフットボールが採用されていたことが窺える。

運動会については、ここでは種目名称のみ確認しておく。「フットボール (フートボール、フウ

トボウル含む)」が 10 校で競技種目名となっていた。その他に、「ラインフットボール」(青森第一高女)、「旗廻フートボール」(今治高女)、「蹴球競争」(丸亀高女)、「アッソシエーションフットボール」(大分高女)、「対列フットボール」(五條高女)、「連絡フットボール」(米子高女)、「フットボールレース」(砺波高女)、「フットボール競争」(魚津高女)、「対列フットボール」(米子高女)、「ガールズフットボール」(堀川高女)、「対列蹴球」(羽咋高女) が確認された。

最後に、遠足と同窓会関係についてである。遠足については、今治高女 (表 49, 1999) において、「明治 44 年の遠足…網敷天満宮に参拝した。境内の松林では、上級生がフートボール (ドッジボールのようなものか) をして遊んだ。男の先生が逃げて生徒が毬を投げた。最初に当たるのは露口校

長先生…」と記されている。他方、同窓会関係については、たとえば、魚津高女(表 20, 1978)では、昭和初期の陸上運動会において、同窓生及び来賓によるフットボール競争が行われたことが記録されている。

V 公立高等女学校における フットボールの具体的様相

前節において、公立高女におけるフットボールの状況を学校史(誌)等の資料から確認してきた。換言すれば、いつ、どこで、どのような機会に女子フットボールが実施されていたのかを量的に把握してきた。その結果、公立高女のみを対象としたことや資料的な制約があるとはいえ、女子フットボールが全国的に普及していた状況の一端を明らかにし得たと判断できる。

本節では、公立高女におけるフットボールの具体的様相を、前節と同様の資料に基づいて明らかにしていく。その際、指導者、服装、用具といった外的条件、女子フットボールのルールとその背景といった内的条件から把握する。そして、これらを把握したうえで、女子アソシエーションフットボールの可能性について写真資料を考証する。

1. フットボールの指導者、服装、用具

まず、公立高女で実施されたフットボールに指導者がいたかどうかについて見ていきたい。丸亀高女(表 47, 1993a)では、「フットボールは朝、始業前の遊びの形で学年の制限もなく、ただ好きな人が集まればよいので指導者もなかったように思います」と回顧されている。一方で、第一岡山高女(表 37, 1969)、埼玉・第一高女(表 13, 1980)、宇都宮高女(表 10, 1936)、長府高女(表 44, 1972)、静岡高女(表 23, 1983)、竜ヶ崎高女(表 8, 1968)、大分高女(表 53, 1986, a)では、校長、教頭、教員、職員が一緒になってフットボールを行っていた様子が記されている。たとえば、埼玉・第一高女(表 13, 1980)では「校長みずからラケットを振り回し、滑稽な態度にてフットボールなどを試み」、宇都宮高女(表 10,

1936)では「フットボールには必ず校長先生を御見受け申候」、竜ヶ崎高女(表 8, 1968)では「放課時間は先生方とテニスやフットボール等をしたり…」とある。他方で、明治後期の一関高女(表 4, 1967)では、「東京女高師の体育専科を出て赴任された足立智子(東京出身)により当時すでにキックボール(サッカーの元祖なようなもの)を初めとし、各種球技、水泳などを手ほどきされた」とある。女子教員によるフットボール指導の一事例として注目される。

次に、どのような服装でフットボールを実施したのかを確認したい。秋田高女(表 6, 1981)では、「明治四十二年春季運動会の種目を挙げるとポロネーズ…フットボール、スプーンレース、クワドリール、綱引きなど全く多種多様である。運動する時の服装は着物に袴姿であり」と記され、明治期の運動会におけるフットボールは着物に袴姿であったことがわかる。厚木高女(表 17, 1978)では、「運動場へは草履ときめられていたので、草履で、袴をはいて、フットボール迄なさったとか」と記載されている。一方、広島・第一高女(表 42, 1982)では、体操の時やテニス・フットボールなどの球技のときも、1913年に体操服が制定されるまで、袴をつけたままで行っていたことが記され、松山高女(表 48, 1961)では、大正後期に「サッカー、野球、ラグビーなんかもしました。黒い短パンで足丸出しだったのですから、先輩に比べるとうんとハイカラになっていた」と回顧されている。上記の服装の変遷は、フットボールだけでなく他の競技も含め、動きやすさをもたらすものであったことは容易に想像がつく。

最後に、用具については、1916年頃の尾道高女(表 41, 1990)、1913・1925年度の沼津高女(表 24, 1926, 1990)の校友会記録、1917年度の大手前高女(表 31, 1987)の校友会記録にフットボール用のボールなどの価格や個数について記載されている。たとえば、尾道高女(表 41, 1990)では「フットボール一個六円だったという…フットボールを年間十個買った」と記録されている。少なくとも、フットボール用のボールを管理していた様子を窺い知ることができる。

2. 女子フットボールのルールとその背景

資料から確認できる範囲であるが、女子フットボールのルールについて確認する。まず、授業時間においてフットボールを実施していた松山高女(表 48, 1995)では、「厳しく構えるや、合図の笛の音に、双方合いて、頭上より落ち来るボールを、投げつ投げられつ、其の勢いのいや盛んにて…」と記されている。また、遠足で実施していた今治高女(表 49, 1999)については、「境内の松林では、上級生がフットボール(ドッジボールのようなものか)をして遊んだ。男の先生が逃げて生徒が毬を投げた。最初に当たるのは露口校長先生…」と記されている。このように手で投げる遊戯もフットボールと称していたことがわかる。

次に、宇都宮高女(表 10, 1936)は、「フットボールは只ボールを蹴上げて、其の高さを争つたのみである」とあり、榛原高女(表 22, 2000)は、「フットボールは鞠を足で蹴り、遠くへ飛ばす遊びのようであった」と記されている。このように、高さや距離を競う遊戯もフットボールと称していたようである。

最後に、運動会におけるフットボールのルールについて、青森第一高女(表 3, 1980)の「ラインフットボール」は「ラインフットボールは所謂フットボール」と記しているのみで、五條高女(表 34, 1996)の「対列フットボール」は、「手をつないでボールを蹴る」としか記されていない。その他、旗廻フットボール、蹴球競争、連絡フットボール、フットボールレース、フットボール競争、ガールズフットボール、対列蹴球については、各種遊戯書に同名の競技が掲載されているものもあるが、同じルールで実施されたかは不明である^{注 6)}。少なくとも蹴る要素を加味しているか、あるいはフットボールという用具を使用し、遊戯化された運動であると判断するのが妥当であろう。

女子フットボールは、他の運動競技種目と同様に自由時間や運動会を中心に実施する機会が確保され、一部の校長においては主たる運動の1つとして位置づけ、服装の改善や用具も整いつつあったことを確認してきた。一方で、女子フットボ

ールは、男子による組織的サッカー競技のルールのみが適用されたわけではなく、遊戯化された多様なフットボールの中から各学校が選択可能な状況でもあったと考えられる。総論として把握するとすれば、女子フットボールは奨励された運動競技の1つであったと言えよう。しかしながら、女子フットボールが奨励された理由については、本研究が対象とした資料からは明らかにできなかった。そのため、補足的に当時の女子フットボールに対する考え方を紹介しておく。

大正期の産婦人科医であった河島右一は、「少女は男児と交つて縄飛びもさせまじやう、輪廻しの競争もさせまじやう、フットボールでも、ベースボールでも快活な遊戯の出来る、質素な服装をさせて男の児と同じやうに育てるのです」(河島・天野, 1921)と、女子にフットボールを男子同様に行うことを主張し、そのために質素な服装の着用を勧めている。一方で、昭和10年代になると、たとえば、佐々木久吉(1938)は、「如何に非理性的な人間であっても、拳闘や格闘、フットボールやラグビーなどをもつて女子に適当なる競技であるとは主張しまい」と述べ、また、羽咋高女(表 21, 1935)では「蹴球 過激であるばかりでなく、男性的で女子には不適當」と明記されている。ただし、これら女子フットボールを危険視する主張が、遊戯化されたフットボールも含むのかどうかは判然としない。

3. 女子アソシエーションフットボールの可能性

本研究で対象とした学校史(誌)等の資料からは、女子フットボールに関する写真を2件発掘することができた。1つは東京・第三高女(表 16, 2003)であり、もう1つは大分高女(表 53, 1986, b)である。前者は、「フットボールと当時よばれていた球技」と題されているが、明治から昭和初期の画像に混在して掲載されているため年代は特定できず、さらに注視してもフットボールと判断することは困難であった。後者は、「アソシエーションフットボール」との題が明示されており、一見した限りではフットボールのように見える。他方で、2011年12月2日付の『四国新聞』

では、丸亀高女の生徒がフットボールをする様子を写した絵葉書が発見されたことを報じている。以下、丸亀高女と大分高女の写真資料を検討する。

3.1 丸亀高女のフットボール写真の考証

丸亀高女におけるフットボールについては、先述してきたように、1911年の運動会種目として「蹴球競争」があったこと、始業前のフットボールが盛んであったこと、始業前のフットボールには指導者がいなかったことを述べてきた。以下、『四国新聞』が報じた写真について検討する^{注7)}。

同校のフットボールの写真は、絵葉書(図1、図2)であり、図1に「香川県丸亀高女運動会

フットボール 四年西」、図2に「フットボール 補習科四年東」との説明文がある。絵葉書が発見されたときに香川県立丸亀高等学校の校長であった馬場康弘は、対戦クラス名と校友会誌『真澄廻鏡』の記録や写真に写った人物の子孫の証言から、図1は1919年、図2は1920年の写真であるとの見解を示している。

改めて図1と図2を見てみると、袴に襷をかけ、鉢巻を締め、ボールを追っている女学生の姿がある。筒袖の上衣と裾を絞った袴は改良服の一種と考えられ、袴姿でありながらも衛生と運動に配慮した服装が採用されていたことが窺える。襷はチームを区別するためであると判断するのが妥

図1 香川県丸亀高女運動会のフットボール1(丸亀高校記念館所蔵)

図2 香川県丸亀高女運動会のフットボール2(丸亀高校記念館所蔵)

当であるが、ゴール枠に類する設備は写真からは確認することができない。ただし、丸亀高女（表 47, 1993a）には、同時期の 1923 年に卒業した学生の寄稿文が掲載されている。この中で「上級生の中に非常に上手な方があって、その人のボールは人々の頭の上を飛んで敵のゴールの中に見事にはいります」と記されている。ボールを相手のゴールに入れることが意識された表現が使用されている。

丸亀高女におけるフットボールのルールを明記したものは未発掘であるが、総合的に推察して、同校では組織的なフットボール、すなわち女子アソシエーションフットボールが実施されていたと言える。

3.2 大分高女のフットボール写真の考証

大分高女におけるフットボールについては、先述してきたように、1916 年の運動会種目として「アソシエーションフットボール」があったこと、1919 年頃から奨励され「校技」に匹敵するほどであったこと、1920 年頃にフットボールが盛んであったこと、教員も関与していたことを述べてきた。

同校のフットボールの写真（図 3）には、「大分県立大分高等女学校秋季大運動会 三年アソシエーションフットボール（中山写真館発行）」との説明文がある。この写真について、大分高

女（表 53, 1986, a）には、1916 年の写真であることが明記され^{注 8)}、「大正 2 年入学第 14 回の足立よりさんの御遺族から写真を拝借して驚きました。当時の運動会の様子が絵葉書として中山写真館から売られていたのです…アソシエーションフットボールで、白たすき組と他との試合の風景」と記されている。

改めて図 3 を見てみると、ワンピース型の服装に襷をかけ、攻守混合競技をする女学生の姿がある。ワンピース型の服装は、二階堂トクヨが考案したチュニックと同様に見える。襷はチームを区別するためであると判断され、ゴールが設置されクロスバーの代わりに紐を確認できる。大分高女（表 53, 1986, b）では、「昼食が終わると、合図の鐘で全校生は括り袴に肩章いと勇ましく運動場所定の場所に整列する。二度目の鐘に先生方も肩章を掛けてお出になる。次いで各自の役割がきまる。…運動の場所は前庭に一箇所後庭に同盟協商、バスケットボール、フットボールの三種の演技場が設けられてある…就中フットボールの如きは其の動作は実に勇壮なものである」と述べられている（大分県立大分高等女学校校友会, 1918）。この叙述において「各自の役割がきまる」に着目すれば、図 3 の写真においてゴールを守る「役割」の選手がいるとも判断される。紐で代用したクロスバーの設置はアソシエーションフットボールのゴールを意識したものと考えら

図 3 大分県大分高女のフットボール（大分県立大分上野丘高等学校校友会所蔵）

れる。また、「勇壮」との記述からは、同校での他の運動種目に比して男性的であったと考えられる。

大分高女におけるフットボールのルールを明記したものは未発掘であり、写真(図3)からはボールを確認することはできない。しかしながら、「アソシエーションフットボール」という用語が使用されていることは極めて重要である。少なくとも、丸亀高女の写真で推察した判断と比べれば、大分高女で組織的なフットボール、すなわち女子アソシエーションフットボールが実施されていた蓋然性は高い。

VI おわりに

本研究の目的は、戦前期の日本における女子フットボールの様相を歴史的に明らかにすることであった。

まず、女子教員の養成を担った女子高等教育機関の中から東京女子高等師範学校、奈良女子高等師範学校、日本女子大学校、東京女子体操音楽学校を対象として、指導者、指導書、課外活動の有無に焦点をあて、女子フットボールの移入と展開に関する状況を明らかにした。各学校の指導者は自著においてフットボールに言及していることから、正課体育や課外活動といった機会にフットボールが教授された可能性が示唆された。しかしながら、東京高等師範学校のように男子サッカーの競技化と普及の基幹となる役割を担った女子高等教育機関は、確認することができなかった。

次に、女子中等教育機関の中から公立高等女学校を対象として、女子フットボールの実施時期と機会を学校史(誌)等から全国的に調査した。その結果、公立高女におけるフットボールに関係する記事や画像は、北海道から九州までの53校で発掘することができた。実施時期は1902年から1940年まで確認され、大正期、明治期、昭和期の順で多く確認された。特に大正期にはフットボールが1, 2を争う盛んな種目であった公立高女も存在していた。一方で、実施機会については、資料的に明らかにできなかったものがあったが、

自由時間、運動会を中心に実施されており、教育課程、部活動、遠足での実施も確認された。特に、定期的な実施や校内大会でのフットボールの実施が確認された公立高女も存在したが、対外試合は確認されなかった。

続いて、女子フットボールの実施が確認された公立高女を対象に、教員の関与、服装、用具、ルールから具体的な様相の解明を試みた。公立高女における一部の校長は主たる運動の1つとしてフットボールを位置づけており、教員も一緒にフットボールを実施するなど一定程度の関与が認められた。特に、一関高女のように女子教員によるフットボール指導の可能性があったことは注目に値しよう。また、運動に適した服装が普及し用具が整備されたことはフットボール実施の敷居を低くするものであったと考えられる。一方で、女子フットボールのルールは、遊戯化されたフットボールを含むため多様であった。見方を変えれば、フットボールは遊戯化することにより女学校に適する運動として受け入れられたのだと考えられる。この多様であり資料的に明示されたルールが判然としない女子フットボールの中で、男子のような組織的サッカーがあった可能性については、丸亀高女と大分高女の写真を考証することで言及し得た。

以上のことから、大正期を中心として女子フットボールは女子中等教育機関で熱心に取り組みされた運動競技の1つであったと言えよう。従来、テニスやバスケットボール、バレーボールなど女子に適するスポーツとして当時評価されたスポーツが、女子中等教育機関において盛んであった実態は解明されてきたが、本研究では、男子に好まれたフットボールが女子にも積極的に行われた事実を明らかにできた。

戦前期における女子フットボールの研究は、端緒についたばかりである。そのため、今後の課題の1つは、本研究で対象とし得なかった女子高等教育機関、公立高女、私立高女、外地の高女、実業学校、師範学校および初等教育段階における女子フットボールについて調査することである。調査対象の拡充は、女子フットボールの全体的な状

況をより明確に把握することに繋がり、女子フットボール研究の基礎をより強固にするであろう。

また、本研究では学校史(誌)調査を主たる研究方法としたが、今後は各校の校友会誌等を用いて、個別のフットボール活動を解明する必要がある。新たな資料群の発掘は、本研究で明らかにし得なかった日本女子大学の女子フットボール部の仔細や公立高女において女子フットボールが奨励された理由の解明に繋がり、女子フットボールを対象とした個別の歴史研究を促進するであろう。

最後に、以上に述べた今後の中心的課題を踏まえて、今後の研究視点を補足的に示しておくたい。日本において女子のための競技会が本格的に開催されたのは、1920年以降のことである。高女などでは、テニス、バスケットボール、バレーボールなどの様々な競技の校内大会が行われるようになり、時には、高女同士の対抗戦も開催されている。しかしながら、テニスに迫るほど盛んであった女子フットボールは、ルールの統一を図る競技化、あるいは対抗戦を実施するための組織化まで至らなかったと判断される。この理由については、「学校体操教授要目」においてフットボールが女子の教材とならなかったこと、男性的で過激と考えられていたこと、明治神宮大会などの種目となっていないことなどが考えられるが、仮説的な域をでていない。

謝辞

資料収集では、特に兵庫県立神戸高等学校校史記念室・校史編纂室及び大分県立大分上野丘高等学校校友会の方々に大変ご協力いただきました。感謝申し上げます。

付記

2021年日本サッカー協会は創設100年を迎える。本研究は、日本サッカー協会からの受託研究「戦前日本の女子サッカーに関する研究」(2018—2019年度)の研究成果の一部である。

注

注1) 1936年の第二次改正「学校体操教授要目」(文部省訓令第18号)では「対列球蹴」となっている(大蔵省印刷局編, 1936)。

注2) 本研究では、1891(明治24)年の中学校令改正により高等女学校が規定されて以降、女子の中等教育機関において女子スポーツの機会が拡大していく1910年代を中心に1940年までの時期を「戦前期」として時代区分した。年代としては戦時期も含まれるが、戦時体制下の女子フットボールは研究対象としなかったため、本研究では「戦中期」は扱わない。

注3) 高等女学校研究会編(1990)は、高女の成立と展開を記述するうえで、学校史(誌)を主な資料の1つとして活用している。1990年時点におけるお茶の水女子大学女性文化研究センターが所蔵する235校の学校史(誌)を高等女学校文獻目録として掲載している。本研究では、戦前の女子フットボール実施の有無を全国的に調査するには、まず学校史(誌)の全国的な調査が必要であると判断した。また、学校史(誌)において積極的な女子フットボール活動が確認できた女学校については、当該校の校友会雑誌を調査し、当時の活動実態を確認した。なお、学校史(誌)を手がかりとした研究は他にも散見される。渡辺(1993)は明治期の公立中学校における主要なスポーツの伝播の状況を学校史に基づいて明らかにしている。また、掛水(2001)も明治期の女学生とスポーツの接点を記述する上で、学校史を用いている。

注4) 1874年に東京女子師範学校、1885年から東京師範学校(高等師範学校)女子部、1890年から女子高等師範学校、1908年に東京女子高等師範学校と改称されている。

注5) 1941年の朝日新聞による調査で蹴球を実施していたのは「長野県芸科家政」と報じられている(朝日新聞, 1941a)。

注6) 対列フットボールは、『新編ボール遊』において、競争遊戯の1つとされ、手をつないで相対し「ボールが敵の頭上を越ゆるを勝とす」(堀江, 1915)と説明されている。蹴球競争は、『最新遊戯教授書 下』において、「ボールを蹴り敵の列間を通過せしむるか或は頭上を越へしめたる時は一点を得」(原, 1908)と記されている。ガールズフットボールについては、『女子チームゲームス』(佐々木・富田, 1926)に記されている。その特徴は、コートを4等分していること、各チームを攻撃者と防御者に区分し移動を制限していることなどにある。

注7) 香川県立丸亀高等学校記念館に所蔵されている丸亀高女関連史料を調査するとともに、絵葉書が発見された当時に香川県立丸亀高等学校の校長であった馬場

康弘氏などへの聞き取り調査を行っている（2018年11月—2019年10月：合計16回）。

注8）大分高女（表53, 1986, b）では、図3の写真是1916年のものと回顧されているが、チュニック式の体操服を採用した時期から、同写真の撮影年を再考する必要がある。チュニック式体操服は二階堂トクヨが1915（大正4）年に英国留学から帰国した後に東京女高師の体操服として採用したものである。大分県立大分上野丘高等学校編（1955）によれば、1918（大正7）年に女教師の平川キヨが着任し、東京女高師で用いた型の「体操服ツリバカマ」を採用したとあることから、図3の写真は1918年以降に撮影されたと判断できる。

文 献

- あげまき会・秋田県立秋田北高等学校編（1981）あげまき八十年。出版社不明, p.28.
- 愛知県第一高等女学校史編集委員会編（1998）愛知県第一高等女学校史。愛知県第一高等女学校史刊行会, pp.42-50.
- 愛知県立津島高等学校九十周年記念誌編集委員会編（1990）九十年の記録。愛知県立津島高等学校同窓会, p.134.
- 朝日新聞（1941a）2月12日。
- 朝日新聞（1941b）2月13日。
- 馬場哲雄（2014）近代女子高等機関における体育・スポーツの原風景：成瀬仁蔵の思想と日本女子体育大学の原型をもとめて。翰林書房, p.88.
- 馬場哲雄・石川悦子（1982）日本女子大学の運動会史：成瀬仁蔵の体育観の発展・具象化としての運動会。日本女子大学体育研究室, p.59, 82, 96, 107.
- 千葉県立千葉高等女学校編（1940）創立四十周年記念誌。千葉高等女学校學友會同窓會, p.132.
- 愛媛県立松山南高等学校百年記念校史編集委員会編（1991）愛媛県立松山南高等学校百年のあゆみ。愛媛県立松山南高等学校, p.89.
- 愛媛県立松山南高等学校創立七十周年記念誌編集委員会編（1961）七十年のあゆみ。愛媛県立松山南高等学校, p.35, 109.
- 江刺正吾編（2003）体操・薙刀からスポーツへ：戦前の女子高等教育機関における身体教育。道と書院, pp.3-8.
- 福岡県立福岡中央高等学校百年史委員会編（1998）福岡中央百年史。福岡中央高等学校, p.50.
- 福岡県福岡中央高等学校六十周年記念史編集委員会編（1958）創立六十年史。福岡中央高等学校, p.50.
- 福島県立会津女子高等学校創立八十周年記念誌編集委員会編（1988）福島県立会津女子高等学校創立八十周年記念誌。福島県立会津女子高等学校創立八十周年記念誌編集委員会, pp.112-113.
- 福島寿男（2011）大正期におけるサッカーの中学校への普及とその日本サッカー史への影響。体育史研究, 28: 45-54.
- 福島寿男（online）日本サッカー・ブックガイド：戦前の女子サッカー関係資料。http://fukuju3.cocolog-nifty.com/footbook/2015/05/post-31e8.html, (参照日 2020年2月29日)
- 群馬県立桐生女子高等学校編（1997）桐女九十年史。群馬県立桐生女子高等学校, p.20.
- 八〇周年記念誌編集委員会編（1982）皆実有朋八十周年記念誌。広島県立広島皆実高等学校, p.40.
- 八十周年記念誌編集委員会編（1990）尾道東高校八十年のあゆみ。広島県立尾道高等女学校広島県立尾道東高等学校同窓会, p.21.
- 「榛原高校百年史」編集委員会編（2000）榛原高校百年史。榛原高等学校百周年記念事業委員会, p.419.
- 浜田高等学校創立百周年記念事業部編（1994）浜田高等学校百年史。島根県立浜田高等学校, p.480.
- 浜田祐輔解説・編（1995）明治の花園：愛媛県立松山高女学校教室日誌。人の森出版, p.159.
- 原藤蔵（1908）最新遊戯教授書：下巻。修文館, p.227.
- 広島県立可部高等女学校編（1932）二十年史。広島県立可部高等女学校, p.50.
- 広島県立三次高等学校創立百周年記念誌編集委員会編（2001）巴峽百年：上巻。広島県立三次高等学校同窓会「巴峽百年」刊行会, p.271.
- 北海道庁立旭川高等女学校（1938）まごころ記念号：三十年史。北海道庁立旭川高等女学校行幸並三十周年記念事業協賛会, p.153.
- 堀江清治郎（1915）新編ボール遊。東京實文館, p.73.
- 實學淳郎（2016）日本におけるサッカーの受容と展開：明治期を中心として。フットボールの科学, 11: 3-12.
- 百周年記念誌編纂委員会編（2003）尚綱百年：土浦高女土浦二高百年の歩み。茨城県立土浦第二高等学校, p.252.
- 兵庫県立柏原高等女学校編（1928）創立二十五周年記念帖。兵庫県立柏原高等女学校, p.147.
- 茨城県立竜ヶ崎第二高等学校編（1968）龍峯五十年。茨城県立竜ヶ崎第二高等学校, p.36.
- 「一関二高60年史」編集委員会編（1967）一関二高60年史。岩手県立一関第二高等学校, p.29.
- 今村嘉雄（1968）学校体育の父 リーランド博士。不昧堂出版, p.37.
- 石川県立羽咋高校「五十年史」校内編集委員会編（1972）羽咋中学・女学校・高校五十年史。石川県立羽咋高校五十周年記念事業委員会, p.198.
- 石川県立羽咋高等女学校（1935）課外指導研究。石川県立羽咋高等女学校, p.169.

- 香川県立丸亀高等学校（1973a）亀城のほとり：香川県立丸亀高等学校創立八十周年記念誌。香川県立丸亀高等学校，p.149.
- 香川県立丸亀高等学校（1973b）想い出：香川県立丸亀高等学校創立第八十周年記念文集。香川県立丸亀高等学校，p.133.
- 香川県立丸亀高等学校創立百周年記念誌編集委員会編（1993a）亀城のほとり：香川県立丸亀高等学校創立百周年記念誌。香川県立丸亀高等学校，p.304.
- 香川県立丸亀高等学校創立百周年記念誌編集委員会編（1993b）史料でみる丸高百年：香川県立丸亀高等学校創立百周年記念誌。香川県立丸亀高等学校，p.170, 194.
- 掛水通子（2001）大和撫子のスポーツ参加：日本における女性とスポーツの出会い。松本芳明ほか編，近代スポーツの超克：ニュースポーツ・身体・気。叢文社，pp.148-149.
- 掛水通子（2016）近代スポーツ史における女性の地位：戦前における女子体育教師の出現に関するジェンダーの観点からの考察。スポーツとジェンダー研究，14：43-55.
- 掛水通子（2018）日本における女子体育教師史研究。大空社，pp.193-194.
- 上川高等女学校（1911）学校要覧。上川高等女学校，pp.2-3.
- 神奈川県立厚木東高校編（2007）夢はるか：神奈川県立厚木東高等学校創立百周年記念誌。神奈川県立厚木東高校，p.32.
- 神奈川県立厚木東高等学校創立70周年記念会編（1978）常盤：創立七十周年記念誌。神奈川県立厚木東高等学校，p.15.
- 可児徳・佐々木等（1921）遊戯競技の実際。東京宝文館，p.91.
- 勝山高等学校創立九十周年記念誌編集委員会編（2001）創立九十周年記念写真集。勝山高等学校，p.52.
- 河島右一・天野馨（1921）月経より育児まで：母と娘の衛生問答。新橋堂，p.40.
- 記念誌編纂専門委員会編（2007）一関二高百年史。岩手県立一関第二高等学校創立百周年記念事業実行委員会，p.45.
- 神戸市立第一高等女学校編（1942）創立三十周年記念誌。神戸市立第一高等女学校，p.690.
- 校史編纂委員会編（1980）八十年史。青森県立弘前中央高等学校創立八十周年記念行事実行委員会，p.88.
- 高等女学校研究会編（1990）高等女学校の研究。大空社.
- 熊本県立第一高等女学校（1935）創立三十周年記念誌。熊本県立第一高等女学校，p.268.
- 熊本県立玉名高等学校校史編纂委員会編（1973）玉名高校七十年史。熊本県立玉名高等学校，p.372.
- 京都市立堀川高等女学校校友会（1933）創立二十五周年記念誌。京都市立堀川高等女学校同窓会，p.22.
- 九〇周年記念誌編集委員会編（1991）悠久のまこと 皆実有明九十年史。広島県立広島皆実高等学校，pp.38-39.
- 牧野武夫編集代表（1939）創立三十年。千葉県立東金高等女学校校友会，p.48.
- 明和会記念誌編集委員会編（1998）愛知県明和高等学校史。明和会明和高等学校設立五十周年記念事業実行委員会，pp.49-50.
- 宮城県第二女子高等学校（2005）二女高百年史。宮城県第二女子高等学校，p.146.
- 文部大臣官房学校衛生課（1924）体育運動に関する調査。文部時報，208：35-40.
- 文部大臣官房学校衛生課体育運動掛（1927）昭和二年一月学校ニ於ケル正課及課外運動ノ概況。健康の女性，4（5）：37-47.
- 文部大臣官房体育課（1933）中等学校ニ於ケル校友会運動部ニ関スル調査。一成社，pp.5-23.
- 村木定雄編（1936）創立六十年。栃木県立宇都宮第一高等女学校，p.78, 88.
- 奈良女子高等師範学校編（1926）奈良女子高等師範学校 第三臨時教員養成所一覽。奈良女子高等師範学校，p.276.
- 奈良県立五条高等学校創立百周年記念誌編集委員会（1996）奈良県立五条高等学校百年史。奈良県立五条高等学校，p.142.
- 新潟県立長岡大手高等学校創立百周年記念誌編集委員会編（2003）ああこの学園の人々よ歌え。新潟県立長岡大手高等学校創立百周年記念事業実行委員会，p.40.
- 岡山県立勝山高等学校（2011）勝山高校創立百周年記念誌。岡山県立勝山高等学校，p.52.
- 恩田裕（1982）本邦におけるサッカー競技の移入と展開について：明治初中期を中心して。成城法学教養論集，3：142-174.
- 恩田裕（1984）本邦におけるサッカー競技の移入と展開について：海軍兵学寮・工学寮及び高等師範学校を中心として。成城法学教養論集，4：254-282.
- 恩田裕（1985）本邦におけるサッカー競技の移入と展開について：明治後期。成城法学教養論集，5：110-136.
- 大分県立大分高等女学校校友会（1918）大分県立大分高等女学校校友会雑誌，第13号。小杉清助（大分県立大分高等女学校内），pp.95-96.
- 大分県立大分上野丘高等学校編（1955）栄光の七十年。大分県立大分上野丘高等学校，p.39.
- 大分県立大分上野丘高等学校編（1986）上野丘百年史。上野丘「百年史」編集委員会，pp.233-234.
- 大久保英哲（2013）日本学生サッカー前史：四高外国人

- 教師デハビランドとヴォールファルトのフットボール. 体育学研究, 58(1): 331-342.
- 大蔵省印刷局編 (1926) 官報 (1926 年 5 月 27 日) 4126: 673-684.
- 大蔵省印刷局編 (1936) 官報 (1936 年 6 月 3 日) 2824: 79-90.
- 大阪府立大手前高等学校百年史編集委員会編 (1987) 大手前百年史. 金蘭会, p.700.
- 大阪府立清水谷高等学校 100 周年記念事業実行委員会記念誌委員会編 (2001) 清水谷百年史. 大阪府立清水谷高等学校 100 周年記念事業実行委員会, pp.44-45.
- 來田享子 (1997) 日本における女性競技スポーツの普及と国際化に関する一考察. 体育史研究, 14: 59-77.
- 雑賀三省 (1924) 女子体育学. 廣文堂, p.199.
- 埼玉県立浦和第一女子高等学校創立八十周年記念誌編集委員会編 (1980) 創立八十周年記念誌. 埼玉県立浦和第一女子高等学校, p.199.
- 佐々木久吉 (1938) 女子の体育 (二). 女子と子供の体育, 3(11): 73-78.
- 佐々木等・富田彦三郎 (1926) 女子チームゲームス. 山海堂出版部, pp.107-114.
- 渋谷 60 年誌編纂委員会編 (1981) 渋谷六十年誌. 群馬県立渋谷女子高等学校, p.180.
- 滋賀県立彦根高等女学校編 (1936) 滋賀県立彦根高等女学校五十年史. 滋賀県立彦根高等女学校, p.172.
- 四国新聞 (2011) 12 月 2 日.
- 白井規矩郎 (1910) 体操と遊戯の時間. 啓成社, pp.807-811.
- 静岡県立沼津高等女学校校友会 (1926) 創立二十五周年記念号. 静岡県立沼津高等女学校校友会, p.250.
- 創立八十周年記念事業委員会編 (1983) わが校のあゆみ: 創立八十周年記念誌. 静岡県立静岡城北高等学校, p.163.
- 創立八十周年記念誌編纂委員会 (1987) 創立八十周年記念誌. 鳥取県立米子西高等学校, p.138, 166, 203.
- 創立 100 周年記念事業実行委員会記念誌編集部編 (2007) 百年史: 白亜の校舎, ここに立つ: 愛知県立岡崎北高等学校創立 100 周年記念誌. 愛知県立岡崎北高等学校創立 100 周年記念事業実行委員会, p.40.
- 創立百周年記念誌編纂委員会編 (2003) 慕いて集える: 東京都立駒場高等学校百周年記念誌. 東京都立駒場高等学校, 巻頭写真.
- 創立百周年記念通史編集委員会編 (1999) 創立百周年記念通史. 愛媛県立今治北高等学校創立百周年記念事業期成会, pp.41-42.
- 創立九十周年記念誌作成委員会編 (1990) 高女・西高九十年史. 県立沼津西高等学校, p.59.
- 創立七十年史編集委員会編 (1969) 創立七十年史. 岡山県立岡山操山高等学校創立七十周年記念事業実行委員会, p.177.
- 高橋忠次郎・酒詰謙之助 (1904) 新式女子遊戯法: 理論 實際. 榊原文盛堂, pp.138-141.
- 東京朝日新聞 (1915) 4 月 18 日.
- 東京高等師範学校フットボール部編 (1903) アソシエーションフットボール. 鍾美堂, pp.123-124.
- 東京体育科学研究会編 (1970) 体育人名辞典 (新体育学講座, 第 54 巻). 逍遥書院, p.144.
- 富山県立砺波女子高等学校同窓会砺波野の会 (2002) 八十年史. 砺波野の会, p.40.
- 坪井玄道・可児徳編 (1909) 小学校運動遊戯. 大日本図書, pp.21-23.
- 坪井玄道・田中盛業編 (1885) 戸外遊戯法: 一名戸外運動法. 金港堂, pp.47-50.
- 津田露 (1986) 第一高女 85 年の歩み. 津田露, p.38, 52.
- 上原鹿之助編 (1910) 実験ボール遊技三十種. 平本健康堂, pp.38-40.
- 魚高八十年史編集委員会編 (1978) 魚高八十年史. 富山県立魚津高等学校, p.203.
- 渡辺融 (1993) 日本における野球の受容・定着課程. 中村敏雄編, スポーツの伝播・普及. 創文企画, pp.11-36.
- 山口県立厚狭高等学校編 (1957) 創立八十五年史: 山口県立厚狭高等学校. 山口県立厚狭高等学校, p.53.
- 山口県立防府高等学校編 (1979) 山口県立防府高等学校百年史. 山口県立防府高等学校, p.481.
- 山口県立長府高等学校六十年史編纂委員会編 (1972) 長府高等学校六十年史. 山口県立長府高等学校, p.57.
- 山口県立山口中央高等学校百年史編纂委員会編 (1990) 山口県立山口中央高等学校百年史. 山口県立山口中央高等学校創立百周年記念事業会, pp.157-158.
- 山本英作 (2005) フットボールの日本的受容に関する一考察: 明治期の遊戯書・専門書の記述にみる競技観. 平成 15-16 年度科学研究費補助金基盤研究 C「近代スポーツの日本的受容に関する研究」研究成果報告書.
- 山本英作・後藤光将 (2003) 坪井玄道によるアソシエーションフットボールの日本的解釈: 『戸外遊戯法』及び『改正戸外遊戯法』における記述の比較検討から. スポーツ史研究, 16: 19-29.

(2020 年 11 月 2 日受付)
(2021 年 3 月 2 日受理)